SDGs×ESD レポート　Vol. 11

ESD は（Education for Sustainable Development）略称で「未来を変える人づくり」を意味します。

発行：NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議（ESD-J）

壊滅的な地球温暖化を回避する「最後の機会」とも言われる国連の会議「COP26」が開催され、効果ガスの排出目標を巡っては、日本やアメリカ、イギリスなどが排出実質ゼロを2050年までに目指すとする一方、中国やロシアなどは2060年、インドは2070年としており溝は深まっています。「存亡の危機に直面していることに今すぐ気付き行動すること」は政策決定者のみに求められているのではなく、私たち市民ひとりひとりにも、求められていることを自覚することが、何より大切ではないでしょうか。

第 10 回 ESD カフェ Tokyo『サステナブルなコーヒー×SDGs』～商品選択から持続可能な暮らしを考える～

事務局・横田 美保

- **日時：2021 年 9 月 18 日（土）**
- **参加者 32 名、講師 2 名**

2 名の講師のお話を伺い、私たちの商品選択が社会に与えるインパクト、サステナブルな商品選択について考えました。

1. 市橋秀夫さん（埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授）

認証ラベルの視点から商品選択についてお話いただきました。認証ラベルはフェアトレード市場の拡大に寄与しましたが市場が大きくなると、生産者と消費者の関係は希薄になり、基準が不透明な認証ラベル、企業の独自認証などが登場し、消費者はラベルの信頼性に疑問を感じるなど、商品選択が難しくなりました。ラベルは商品選択の目安にはなりますが、ラベルだけでは十分な情報とは言えず、商品の生産者・背景を具体的に知ること、消費者と生産者が顔の見える関係性を構築することで、私たち消費者はよりエシカルな、信頼に足る商品を選択することが出来ます。日本では、味覚、品質の至上主義が強いですが、それらを突き詰めることで環境や社会的な負荷が生まれていることにも目を向けなければなりません。

2. 三本木一夫さん（国際日本研究センター研究員、JICA コーヒー専門家）

サステナブルなコーヒーとは、生産地域の自然環境の保護や再生、減農薬/無農薬栽培の推進、生産者の収入の安定化、お金の流れの透明性の確保、農園労働者の人権保護や生活環境の改善、生産履歴の確保など、現在＋未来を考慮し、自然環境や人々の生活を良い状態に保つことを目指して生産/流通されたコーヒーです。三本木さんはコーヒー栽培の指導者として、栽培方法を選択する際には、品質、生産コスト、栽培技術、そして環境への配慮を総合的に検討して決めているそうです。SDGs に取り組んでいるコーヒー農園として、CO_2排出量ゼロ（人力で果肉の除去）、水使用量を削減しているグアテマラの事例等を紹介していただきました。

後半はグループに分かれて、”何が変わったら、消費者はもっとエシカルな商品を選ぶようになるか”について意見交換しました。参加者からは、「学校教育の中で消費者教育が必要。コーヒーの現状をロールプレイするなど、若い世代がこのような問題に触れる機会を創出する」「コーヒーを飲んだときにその背景（産地・生産者）を考えるようなきっかけを作る」「エシカルなコーヒーの購入者にインセンティブを付与する」「フードマイレージを顧慮して、地産地消の商品を選ぶ」「生産-流通-加工/販売-消費者、行政という全ての関係者が情報を共有・連携、協力して取り組む」ことが必要等の意見が出ました。

＜講師からの所感＞

◆**市橋さん**：今回のセミナーを通じて、改めて教育的なアプローチの重要性を感じました。

◆**三本木さん**：生産者が持続可能で良いコーヒーを生産し、消費者が購入して支えることで良い取り組みが継続するため、関心の薄い層がサステナブルな商品を手に取ってくださるような契機づくりを今後も行っていきたいです。

◆今回は上町珈琲様にイベントのためにサステナブルコーヒーセットをご用意いただきました。 是非、生産者、生産地に思いを馳せながらコーヒーをご堪能下さい。
http://www.kouchajima.com/

INDEX
第10回ESDカフェ「サステナブルなコーヒー」報告・・・P1
環境省ローカルSDGs人材育成地方セミナー告知・・・P3
第6回、第7回オンラインセミナー実施報告・・・P5
第11回ESDカフェ「身土不二」報告・・・P2
第4回、第5回オンラインセミナー実施報告・・・P4
羅臼研修実施報告・セミナー予告・編集後記・・P6

第11回ESDカフェTokyo「身土不二」

事務局 後藤 奈緒美

- **日時：2021年10月31日（日）**
- **参加者 28 名、講師 2 名**

■身体を通して地域を学び、地域の安心食材を食べて元気に育て！

講師：鈴木大輔さん（NHK テレビ・ラジオ体操の体操指導者、社会福祉法人にじのいえ　理事長）

NHKの体操指導員として、全国を飛び回っている鈴木大輔さんは、体操を通じて健康な身体作りを推進しながら、いくつもの草鞋（わらじ）を履いています。

第二の草鞋は、埼玉県坂戸市の社会福祉法人にじのいえ・むぎのこ保育園の理事長です。保育園のこども達に提供する食事は、手作りにこだわり、なるべく地元の野菜を使い、その野菜作りを保育園の活動の中に取り込むようにしています。畑での農作業自体が運動になることもありますが、自分で育てた野菜を食べるという経験が幼少期における成功体験と達成感に繋がるからだそうです。

北坂戸駅を中心にした地域で「地域社会にたくさんの幸せを作りたい」という理念のもと、福祉施設と保育園を運営し、地域社会と保育園、小中学校が緩やかに連携する仕組みづくり「北坂戸 Small Social Innovation プロジェクト」を展開しています。

第三の草鞋は、研究者です。現在、弘前大学大学院に在籍しています。今回のセミナーでは、長寿県データの比較を事例としてご紹介いただきました。分析の結果、長寿の 3 要素は、「運動」「栄養」「社会参加」で、雪深いなど外的環境による影響はやむを得ないものの、人が孤立しない状況を作ることが重要で、政府も支援策を講じていると紹介されました。

鈴木さんは、地元で「障害児×高齢者」「障害児×大学生」といった様々な自然体験や農業体験を通じたコラボ企画を展開して、自然体験を通した循環型の活動が「当たり前」の地域社会を創る努力を続けています。

■有機給食と自然と共生する里づくり

講師：鮫田晋さん　（千葉県いすみ市農政課）

いすみ市は、千葉県の房総半島の真ん中辺りに位置する人口 3.7 万人の町です。この小さな町は、豊かな自然に恵まれた環境でありながら、農家の高齢化によって耕作放棄地が増え、移住者の受け入れを推進しています。今回講師としてお話し頂いた鮫田さんもいすみ市へ移住してきたひとりです。

今からおよそ 10 年前に策定された「生物多様性国家戦略」を受けて、各地でローカル生物多様性戦略が作られた頃、いすみ市では、多様な関係者と協議会を設立して、「自然と共生する里づくり」に向けた取り組みが始まりました。中でも市長が兵庫県豊岡市のコウノトリを育む水田の取り組みに共感し、2013 年に試みるも、単なる無農薬の水田耕作は残念な結果となってしまいました。

そこで、2014 年から 3 年間、有機農法の専門家の指導を受けた結果、市の試みに協力した農家の中から、次々と成功する者が出ました。皆で話し合った結果、この安心安全なお米は、町の未来を担う子供たちにこそ食べてもらいたいという想いで一致しました。ところが、学校給食に有機米を使うには給食費 169 円の値上げが必要でした。2018 年から学校給食全量有機米を実現することができた背景には、実は、差分を市が財政負担するという英断がありました。

同時に、地元の市民団体と連携して、「環境」「農業」「食」を一体的に扱う教育プログラムを開発し、総合学習の時間に、田んぼの体験活動を組み込みました。すると、給食の食べ残し量が減少しました。こうしたいすみ市の給食全量有機米の取り組みは、様々な表彰を受賞し、注目されるようになったことで、差額の補填をはるかに上回る宣伝効果が得られているということです。最後にウエンデル・ベリーの「食べることはひとつの農業行為である」という言葉で締めくくりました。

後半のワークショップは、有機食品の先進国であるフランスの事例を取り上げ、「日本もフランスのように有機食材を取り入れたいか、どうしたら実現できるか？」について、グループで意見交換し、制度や理念、政策等について意見が出ました。

参加者からは「食の話題から派生して、長寿社会のキーワードが「社会参加」だとお教えいただき、多世代による食を通じた活動の可能性を感じられました。」「未来の「食を守る」ことは、全てに繋がっている」「いすみ市の成功事例のご紹介から全国に広げていくにはどうすればいいのかと考えさせられる内容だった」「お二人の熱い思いが伝わりました。情熱と協働力のすばらしさが印象的であった」「環境教育の間口も奥行きも広がりました。」との感想が寄せられました。

※第11回、第12回のESDカフェは、未来につなぐふるさと基金の助成を受け、市民参加型プログラムとして実施しました。

参加者募集中です！

第 12 回 ESD カフェ Tokyo「地球にやさしいパンを食べる～小麦と生物多様性」
（ハイブリッド開催-パン・オ・スリール@渋谷とオンライン）

◆**開催日時**：11 月 23 日（祝）　17:00-19:00

◆**お申し込み・詳細**：https://esdcafetokyo12bread.peatix.com/

主催：環境省

2021年度 ローカルSDGs人材育成地方セミナー

みんなで地域の未来を創る！SDGsアクション

オンライン＋対面のハイブリッド開催

是非、ご参加ください！

全国９か所にて開催！

詳細・お申込みはこちら

https://www.esd-j.org/news/7515

✧ 各セミナーはZoomウェビナーでも開催します。
✧ 後日、ESD-Jのウェブサイトに開催レポート（1ページ程度）を掲載します。

■ 全国各地で持続可能な地域づくりに取り組む方々をお招きし、実践事例やコミュニティの可能性ついてお話を伺います。

■ 持続可能な地域づくりを担う一員として何が出来るかをみんなで考え、明るい未来のために一歩を踏み出すきっかけづくりの場です。

12/19（日） 13:00～15:00 アウトドア業とローカルSDGs
講師：自然考房 Nature Designing代表　鈴木 宏紀 さん
会場：北海道日高町／国立日高青少年自然の家

12/4（土） 13:00～15:00 次世代の眼から見る 大崎耕土SDGsアクション
講師：宮城大学　郷古 雅春 さん
　　ブルーファーム株式会社　早坂 正年 さん
会場：宮城県大崎市／凛菜上の家

1/23（日） 13:00～15:00 パートナーシップで育む 京都のごみ削減活動
講師：京都大学　浅利 美鈴 さん
会場：京都府京都市／京都里山SDGsラボ

12/12（日） 14:00～16:00 SDGs 海と川を守ろう実践セミナー
講師：NPO法人岡山環境カウンセラー協会
　　事務局長　中平 徹也 さん
会場：岡山県岡山市／岡山市立京山公民館

2/23（水） 14:00～16:00 全体セミナー
全国８か所で開催した地方セミナーのとりまとめ・総括
講師：立教大学　阿部 治さん
会場：東京都千代田区／日比谷図書文化館

1/29（土） 14:00～16:00 海洋プラスチックから考える 対馬型SDGs
講師：NHKエンタープライズ
　　エグゼクティブ・プロデューサー 堅達 京子 さん
　　一般社団法人対馬CAPPA　松井 秀明 さん
会場：長崎県対馬市／対馬市交流センター

1/16（日） 13:30～15:30 森という場の可能性 子どもとひらくローカルSDGs
講師：森の案内人・写真家　小西 貴士 さん
会場：山梨県北杜市／山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

2/6（日） 13:00～15:00 食から持続可能な地域づくりを考える
講師：株式会社グリラス 関係者
会場：徳島県板野郡／株式会社ハレルヤ

1/30（日） 14:00～16:00 若者と考える持続可能な遠山郷の未来
講師：松本大学　田開 寛太郎 さん
会場：長野県飯田市／南信濃地域交流センター

■お問い合わせ：
特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J)
TEL：03-5834-2061（月・木 10:00～18:00）
E-mail：jimukyoku@esd-j.org

ESD-J 主催 オンラインセミナー

第4回～第7回を報告します！

「SDGs を見据えた人づくり～ESD for 2030～」
コロナ時代の持続可能な社会をどう創るかのための人材育成

毎月第4土曜日 13:00～15:00 開催

第４回７月 24 日（土）参加者 41 名
「ESD の新たな展開を考える ～ESD 世界会議の結果を踏まえて～」

◆ファシリテーター：ESD-J 理事・鈴木 克徳

５月に開催された ESD 世界会議の結果について、会議に参加された３名の講師からご報告いただきました。

環境省大臣官房総合政策課環境教育推進室　室長補佐 田代　久美さん

まず国内における脱炭素社会、循環経済、分散型社会への重要性を説明され、世界的にも地域循環が強調されていること、欧州では職業訓練が重視され、地域の将来に貢献できるような能力育成の教育が行われていることが紹介されました。

東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター主幹研究員 及川　幸彦さん

機関包括型アプローチをテーマとしたセッションにて、文科省からの依頼により、東日本大震災の経験を踏まえた防災・減災教育をどうホールスクール・アプローチとして行うかについて発表されました。セッションでは、倫理観の問題、地域社会との連携、モチベーションの増進策などが議論されました。

国連大学サステイナビリティ高等研究所 野口　扶美子さん

地域での ESD の推進のセッションのモデレーターを務めた所感として、①脱公教育＝地域重視の兆しが見られたこと、②地域の視点から教育を再構築する動き、③地域での実践の理論化、体系化と政策への貢献の必要性が説明されました。

グループディスカッションでは、“今後 10 年の ESD 推進にあたって重要と考えられること”について議論され、「学校が受動的なだけでなく、地域に積極的に働きかけることが重要」「気候変動教育が益々重要になるが、教員を支えるためのシステムづくりが必要」等の意見が出ました。

最後に、本日の議論は今後の 10 年の ESD を議論するための出発点であり、引き続き様々な機会を作り、マルチステークホルダーにより議論を深めていくことが重要と総括してセミナーが終了しました。

第５回８月 28 日（土）参加者 47 名
「ESD×持続可能な消費と生産」

◆講師・ファシリテーター：ESD-J 理事・下村 委津子

下村理事の発表要旨

「買い物は毎日の投票」という言葉にもある通り、私たちは消費者として商品を選ぶ度に、社会を変える一票を投じています。グリーンコンシューマーの考え方を広めるための例として、「グリーンコンシューマー買い物ゲーム」という、商品に付けられたラベルの見方を体験しながら学べる取り組みや、「ぐりちょ」というエシカルな商品のラインナップ、どこで売っているのかが分かるアプリが紹介されました。

（ぐりちょ:　https://guricho.net/）

グループディスカッションでは「グリーン＆エシカル消費、サステナブル消費をどうやって実践していけばよいのか」について、意見共有を行いました。意見の抜粋は以下の通りです。

・最も身近なエシカル消費の方法は、地産地消ではないか。

・教育業界では既にサステナブル消費についての教育がなされているが、取り組みを強化するためには教育者の更なる意識向上が課題ではないか。

・エシカル消費に関して、学生よりも大人世代の教育が不足しているのではないか。学校教育以外にも消費者としての意識向上を目指す活動が重要である。

・商品が作られる背景、生産者の顔を見られるようにする等の工夫によって、値段以外の価値を見つけられるようになれば良い。

◆所感（インターン・髙橋この葉）

安いという理由で、環境負荷の大きな商品を選んでは、そのようなことが許される社会を肯定することになります。持続可能な社会を目指すために、毎日の買い物における選択が私たちにできる行動の一つです。またエシカル消費行動のためには、消費者側がアンテナを張ろうとも、企業など作り手が情報を開示しなければ適切に選ぶのは困難なため、情報提供を求める必要があります。エシカルな商品を社会に浸透させていくには様々な年齢層への教育的アプローチが必要であり、ESD 推進活動の一環として積極的に支援する必要性を感じました。

第 6 回　9 月 25 日（土）参加者 44 名
「地域が変わる！SDGs」四国 ESD 実践事例紹介
（四国地方 ESD 活動支援センターとの共催）

◆ファシリテーター：ESD-J 理事・宇賀神 幸恵

「ESD まつり～地域と共に～」 公園を活用した地域への ESD 発信
講師：井上　修 さん（善通寺こどもエコクラブ代表）

2050 年ゼロカーボンシティ宣言をした香川県善通寺市では、2016 年より公園を活用した「ESD まつり」が開催されています。県内の多様な団体が SDGs や ESD をキーワードに出展し、分野や地域を超えた連携・交流の場となっています。子どもを対象にした自然に親しむワークショップや体験型の学びも提供しています。参加した団体の中からは事業企画に ESD を取り入れたいという団体が出てくるなど様々な成果が生まれています。

「うどんからうどんを作る？うどんまるごと循環プロジェクト」
講師：久米　紳介 さん（うどんまるごと循環コンソーシアム事務局長）

香川はうどんの生産量日本一である一方、その廃棄量も多いことが課題です。NPO、企業、自治体、大学、農家、ボランティア等、様々なステークホルダーがコンソーシアムを組織し、うどんをはじめとする食品残渣を分別・回収、残渣をメタン発酵でバイオガス化し、再生可能エネルギーを生み出す「うどん発電」を行っています。同時に残渣から肥料を作り、小麦畑に散布、小麦を育て収穫して小麦粉にし、うどんを再度生産する「うどんをまるごと循環させる」システムを構築しました。本プロジェクトの他の側面として、県内学校等の環境教育の推進、地域の課題から SDGs に取り組む教育の場としても機能しています。

グループワークでは、地域を循環型にするためにどんなことが必要かを議論し、「活動の主体は市民だが、政治的な中長期的支援、施策が重要」「人材の地域での確保」「学校教育のみならず生涯を通じての学び」「行政、企業、地域市民の連携」などが必要との意見が出ました。

四国 ESD センター近森センター長より：ESD は普遍的な概念ですが、活動するのは地域ベースとなるため、ESD という一般的な考え方と、個別の取り組みをどのように関連させながら実践していくかがポイントです。

第 7 回　10 月 23 日（土）参加者 23 名、講師 4 名
国際交流・ユース×ESD「近くて遠い国だった」韓国との SDGs 時代の国際交流を考える ～北九州からの発信
（北九州 ESD 協議会との共催）

◆ファシリテーター：ESD-J 理事・三宅 博之
◆司会：北九州市立大学・原優依さん

ブルーアース　青い地球の会・後藤加奈子さんが RCE 北九州と韓国 RCE インジェ、トンヨンとの交流史を説明してくださいました。スタディツアー等の人的交流、文化交流、持続可能な地域づくりの実践の学び合いを行い、ESD の 10 年の成果として、韓国側では市民による政策提言の動きが生じたことが挙げられました。

地球交遊クラブ代表・服部祐充子さんより北九州と韓国の国際交流の中で、学びを深めるには仲間が必要であること、そして自らの視点を持つことが重要であるとお話されました。

次に**北九州市立大学の弥山葵さん**がソウル・ドボン区の文化的に重要な建物から中継をしていただきました。ゲストの**ドボン区役所持続可能発展課のペ・ヒョンスンさん**からは、同区の ESD に関する取り組み「国際 ESD ユースプロジェクト・ヌル」を説明していただきました。プロジェクト・ヌルは研究型のプロジェクトで、共通のテーマを設定し韓国、日本、中国、インド、オーストラリアの小中高大学計 28 校から参加した 61 名で実施されました。このプロジェクトは、オリエンテーション、理論授業、ワークシート作業、成果共有、意見交換、ポートフォーリオ製作、国連大学への提出という流れで行われ、具体的には、写真でメッセージを伝え分析する活動「Photo-voice」を行いました。

後半はグループディスカッションで「あなたにとっての国際交流・国際理解とは。国際交流を通じてどのように国際理解を深めたら良いか。」を話し合いました。「交流をサポートしてくれる人材、仕組みづくりが必要」「リアルな交流とリモートの交流の両方を活用することで交流が深まる」「一般市民レベルの交流が重要」「共通認識を高め、類似した活動や興味・関心などのマッチングを行う」などの意見が出ました。

羅臼町全校全教員を対象としたESD・SDGs研修会の実施

【背景・経緯】ESDの10年からSDGs、学習指導要領の改訂へ

ESD-J事務局　後藤 奈穂美

ESDの10年（2005～14年）の提案国である日本は、関係省庁連絡会議を設置し、我が国における「国連ESDの10年」実施計画を策定し、国内実施を推進しました。この時は、総合的な学習の時間を利用するなどして、熱心な校長や教員を核としたESDを展開した学校が登場しましたが、ESDという言葉が馴染まず、一部の地域を除き、広く浸透しませんでした。

ESDの10年と入れ替わるように、持続可能な開発目標(SDGs)が、2015年国連総会で採択され、2030年を目標年とした17の目標と169の達成基準が発表されました。「誰一人取り残さない」という強いメッセージとポップなデザインが注目を集め、企業や教育現場等、多方面で活用されています。

この間、自然環境では気候変動による被害は顕在化し、技術分野ではIT化が進み、経済分野では特定企業の市場独占が進み、市民の間でも電子マネーが一般化しました。

こうした時代の変化や周囲ニーズに対応すべく、10年ぶりに学習指導要領が改訂されました。2020年度より順次、小学校、中学校、高等学校と実施されます。この新学習指導要領には、ESD・SDGsの考え方が組み込まれています。

【ESD・SDGs研修会の実施報告】

ESD-J理事　中田　和彦

令和3年7月27日(火)、ESD-Jなどが主催し、世界自然遺産知床を有する北海道羅臼町にて、町内の教職員約70名を対象に、ESD・SDGs研修会を実施しました。

羅臼町では、生物多様性、野生生物との共存などの自然や人々の暮らしの学びを通して、ふるさとへの愛着心と課題解決に向けて主体的に行動する力を育むため、幼小中高一貫教育の柱として、「知床学」を立ち上げ、積極的にESDに取り組んでいます。

幼稚園から高等学校までの教職員を対象とした全町的な研修会は初の試みであり、その背景には、人口減少が進み、都市部から遠距離にあることなどから、教職員が若く、異動サイクルが早いため、「知床学」への理解が深まっていないのではないかという、教育委員会の危機感がありました。

１日日程で行われた研修会は、午前はオンラインによって小金澤孝昭理事と小玉敏也理事を講師として、ESD・SDGsに関する基本的な事項を学び、午後は対面形式で、「知床学」の生みの親とも言える元羅臼町教育委員会環境教育主幹の金澤裕司氏に御助言をいただきながら、今後の取り組みについて異校種による意見交換を行いました。

ESD-Jとしては、学校におけるESDのさらなる推進に向けて、本研修会をモデルケースとしてプログラムの完成度を高め、各地へ提供できるようにしていきたいと考えています。

なお、参加者アンケートなどの詳細は、ESD-JのWEBサイト(https://www.esd-j.org/news/events/6688)をご参照ください。

◆編集後記：公益信託大成建設自然・歴史環境基金の助成を受け、2021年12月から2022年11月に『水田の生物多様性保全の推進と持続可能な社会の担い手の育成事業』を実施することになりました。千葉県で「田んぼの生き物調査」、大崎市の「渡り鳥とふゆみずたんぼ」をテーマとしたセミナー、対馬の田猫（ツシマヤマネコ）と田んぼの関係をテーマとしたセミナーを実施する予定です。詳細は、メルマガ、ウェブサイト等にてお知らせいたします！

LINEアカウント開設しました!

特定非営利活動法人持続可能な開発のための教育推進会議

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 201　T:03-5834-2061　F:03-5834-2062

会員募集中：正会員（10,000 円）、準会員（3,000 円）詳しくは WEB サイトをご覧ください